

絵解きの寺

浄土宗・荻萱山寂照院

かるかや山
西光寺

はるばると尋ねし我が子を前にして
父と名のれぬはかなさよ



荻萱道心石童丸御親子御絵伝《江戸中期》



善光寺と共に栄えた

「絵解きの寺」

かるかや山西光寺は、善光寺の門前町・長野市の中心街にあり、開祖荻萱上人とその御子信照坊道念上人（幼名石童丸）のお二人が刻んだ二体の「荻萱親子地藏尊」（荻萱上人作は市指定重要文化財）を本尊として安置しております。

また、絵解きを現在に蘇らせた「絵解きの寺」としても知られ、江戸時代の「荻萱道心石童丸御親子御絵伝」二幅が寺宝として伝わっています。

荻萱道心とは、筑前の国守で荻萱の荘に暮らしていた加藤左衛門重氏が出家して名乗った法師名です。

かるかや山西光寺

慈光霊苑

長野市安茂里大平



北村西望作
慈光観音

宗派にかかわらず
ご相談ください。

観音さまの
大きな慈愛に
包まれて。



市街地から車で10分。善光寺平一望の小高い場所に開かれた荘厳静かな霊苑です。観音さまの大きな慈愛の光と充実した設備の墓所で、故人と静かに語り合う時間を。ご希望の方は随時見学も出来ます。



荏萱山寂照院 西光寺

〒380-0826 長野市北石堂町1398
電話 026(226)8436 FAX 026(224)9180

長野駅から徒歩7分

荏萱道心石童丸御親子御絵伝《江戸前期》



高野山で修行し、後に善光寺如来に導かれ、この地に下り、草庵を開き、日々善光寺へ参詣しながら地藏尊を刻み、念仏を広められたのでした。善光寺との深い縁で結ばれた当山は、その昔、善光寺南大門とも称せられ、善光寺参詣の人々が必ず立ち寄つていく寺として栄えてきました。また界隈は、石童丸にちなんで石堂町と呼ばれ、当山が広く庶民に親しまれ慕われてきたことがしのばれます。境内には、荏萱上人・石童丸御親子の銅像や荏萱塚、信濃新四国霊場石碑、大師堂（園通殿）、長野県最古の芭蕉塚、一茶句碑などがあり、八百年の歴史と伝統に支えられた慈愛の灯が、今なお消えることなく受け継がれております。

時を超え語り紡ぐ
親子の絆と御仏の導き

苅萱道心石童丸御親子御絵伝

苅萱道心と石童丸

今からおよそ八百年前、九州六カ国の国守加藤左衛門重

氏は、世の無常を悟り、京の黒谷に登り法然上人の弟子に。

ある夜、延命地藏尊のお告げを受け、高野山に入ります。

国に残された千里御前は、男児を出産し「石童丸」と命名。

石童丸十三歳の春、父恋しきをつのらせ、母と共に

黒谷へ、さらに高野山へと長い旅に出ます。当時、

高野山は女人禁制、石童丸は母を麓の宿に残し、

西光寺本堂での「苅萱道心石童丸」の絵解き風景



「十王めぐり」

かるかや山西光寺 絵解きの世界

絵解きは、説教・唱導を目的とする、絵画を用いた文芸・芸能です。そのルーツは、インドにあるとされ、中央アジア・中国・朝鮮半島から日本に伝わりました。□演者の大意即妙な語りが聴衆を引きつける絵解きの多くは、現在、寺社を中心に伝えられ、ここ西光寺では、物語性豊かな「苅萱道心石童丸御親子御絵伝」の絵解きを行っています。他に「冥途への旅立ち（十王めぐり）」の説明も行います。

絵解き・宝物拝観 三〇分五〇〇円

「苅萱道心と石童丸」(約二〇分)

「十王めぐり」(約一〇分)

紙芝居

「石童丸のおはなし」
(約一〇分)

苅萱道心・石童丸
親子の銅像



善光寺との深いご縁で建てられた
回向柱に触れて御仏と結縁

かるかや山西光寺は「善光寺現本堂」建立の普

請惣奉行小山田平太夫ゆかりの地。善光寺御開

帳大回向柱と同じ木から作られた回向柱が本堂

前に建立され、尊い仏さまとのご縁を結びます。

父を尋ねて山内に入り、奥の院は無明の橋で、花桶をさげた僧に出逢います。この僧こそ父・苅萱道心。道心は、石童丸がわが子であること知りますが、仏に捧げた身ゆえ名乗ることが出来ず、「尋ねし父は、すべてにこの世にない」と告げ、山を下りよう論じます。山を下りてみると、母は長旅の疲れから帰らぬ人。泣く泣く国に帰れば、姉も亡く、石童丸は再び高野山に登り、苅萱道心を師僧と仰ぎ、信照坊道念と名乗り、三十四年間修行。その後、道心は、善光寺如来に導かれて信濃の地に下り、一寺（今日の苅萱山西光寺）を建立。二刀三礼の地藏尊を刻み、十四年間常行念仏に励み大往生を遂げられました。父苅萱の往生を知り、道念も当山へ移り住み、父の菩提安かれと苅萱塚を建立。ご自身も二刀三礼の地藏尊を刻み、親子地藏尊として本堂に安置されたのです。



苅萱山西光寺本堂



苅萱塚（鎌倉時代）

左は石童丸の母君・千里御前の御墓、中央は苅萱上人の御墓（信濃七塚の一つ）。右は石童丸の御墓です。

子授け・安産・子育ての霊石



苅萱道心は、父重昌が香椎宮に詣でて授かった霊石の霊験によって生まれました。苅萱道心誕生譚にちなみ、当山本堂に祀られた漆黒の石は、子授け・安産・子育ての霊験もあらたかな霊石として信仰されています。

雪ぢろや 徳屋のすすきの刈残し

長野市重要文化財。奈良時代の作で中の陀羅尼経は世界最古と言われる印刷。



信濃最古の芭蕉塚

寛保三年（一七四三）芭蕉翁五十回忌法要で建立。

一茶自筆の句碑

花乃世、仏の身とへおや子かな
一茶自筆の文字が刻まれた苅萱道心・石童丸親子を詠まれた句碑。

朝日山大蛇の塚

「家運興隆・無病息災・金運招福」に霊験あらたかな塚として広く信仰されています。

善光寺七福神巡り 第一番 寿老人像



福德・財運・長寿の神とされ、広く信仰されています。中国は宋の人で南極老人星の化身とされ、右手に巻物を付けた杖を、左手に不老長寿の桃を持っています。



山門石標

ご本尊 苅萱親子地藏尊

（木像・来迎地藏尊像）◆ 苅萱上人作は、長野市重要文化財

苅萱上人・石童丸親子が、子授け・子育ての願いを込めて彫られた地藏尊で、右手に杖、左手に宝珠を持ち、両袖を風になびかせた、珍しい貴重な来迎地藏尊です。



日本五大説経として古くから知られ、広く語られてきた「かるかや」の物語。

西光寺の絵解き、パリへ

西光寺 寺庭 竹沢環江

かるかや山西光寺は昔から「絵解きの寺」と言

れたのです。

われてきました。その絵解きは一時途絶えていましたが、四十年前に第五九世徳譽俊雄住職夫人繁子が復活し、第六〇世浄譽信宏住職夫人環江が引き継ぎ、現在当山の絵解きはこのふたりによつて行われ、日々訪れる参拝者に供されています。

その西光寺の絵解きが、二〇一五年秋（十月四日〜十二日）、次いで二〇一八年秋（九月二十六日〜十月五日）にフランス・パリで行われました。名古屋大学阿部泰郎教授と梶山女学園大学伊藤信博教授とのご縁により、「刈萱道心石童丸御親子」と「六道地獄絵」の絵解き口演の機縁に恵ま

れたのです。「六道地獄絵」の絵解き口演は、パリ八区モンソーロ公園内にあるチュルヌスキ美術館で開催、聴衆は事前に募った美術愛好家、研究者など五十名限定でした。口演用の掛け軸は、伊藤信博教授が今回のために当山の地獄絵をナイロン生地に複製したもの六幅を作ってくださいました。口演はお羽根指しで絵を指し示しながら地獄の様子を語り、パレ教授がこれをフランス語に翻訳、聴衆に伝えるというスタイルで進められました。今回は時間の都合もあり短かめのパリ用台本を作り行いましたが、皆さまスマホ片手に記録をとりながら

興味と関心を持ってお聞きくださいました。

滞在中、別の日にはパリから東に移動、ドイツ国境近くの町ストラスブールのストラスブール大学で「刈萱道心石童丸御親子」の口演をさせていただきました。会場となった大学の講堂は、歴史的かつ重厚な建物で、二〇〇名もの学生と「日本の絵解き口演」という情報を得て集まった近隣の住民の方々一〇〇人の前で口演させていただきました。

参加者の皆さまには「絵解き」について書かれたフランス語のテキストを配布し、掛け軸と大画面のスクリーンを使つて語らせていただきました。普段やっている通りの日本語での口演でしたが、皆さま熱心にお聞きくださいました。同講堂では、当山の絵解きの他に、千葉県市川

市の徳蔵寺（真言宗）の声明と名古屋大学大学院の方の「聖徳太子絵伝」の絵解き口演も行われました。

日本文化としての絵解きを、二度にわたつて海外で紹介、口演させていただいたことは、「絵解きの寺西光寺」にとりまして一つのエポックとなる出来事であり、思い出深い歴史の一ページを重ねることとなりました。

これらすべてが、仏様のご加護のおかげと感謝せずにはいられません。これからもうこうした貴重な経験と多くの出会いをいただきなから、絵解きを続けさせていただければと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

追記・二〇一九年秋にはアルザス・欧州日本学研究所の招待で、ストラスブールのプロテスタント・メデイカル図書館で絵解きを行った。

合掌

国語逍遙

88

清湖口敏

大阪市内の小学校に通った私は6年の夏、林間学舎で初めて高野山（和歌山県）に登った。そこでお坊さんから聞いた「苅萱道心と石童丸」の物語は、あまりにも悲しくて、目にたまった涙を友達に気取られまゝと慌てたことを、今でもはつきりと覚えている。

その林間学舎から半世紀余を経たこの夏、同じ物語を再び聴く機会があった。信濃（長野県）の善光寺にほど近い西光寺の副住職夫人、竹澤環江さんによる「絵解き」の「出張」口演が、東京都内の大学ホールで催されたのである。

絵解きとは、高僧の絵伝や寺社縁起絵、地獄絵などの掛幅絵を聴衆に示し、絵の内容や意味を解説するものである。物語と絵、語りの3つが一体となった、さしずめ視聴覚説教といったところだろうか。もともとは仏教化が目的だったが、鎌倉時代あたりから芸能化していき、江戸の頃には庶民の娯楽の一つでもあったという。

伝統の「語り芸」に酔った

恋しさに母とともに旅立ち、父を尋ね歩く。やがて高野山の麓まで来たものの、高野山は女人禁制。石童丸は母を麓の宿に残し、ひとり山に入っていく。

奥の院の無明の橋で一人の僧と出会う。この僧こそ父道心なのだが、石童丸は父の顔を知らない。一方、目の前の石童丸をわが子と知った道心は涙で頬をぬらす。「お目に涙が……。もしや私の父上さまでは……」。

父ではないかと必死に迫る石童丸。しかし道心は仏道修行の身のゆえ父とは名乗れず、そなたの父は去年亡くなったと教える。涙ながらに山を下りた石童丸を待っていたのは、息を引き取ったばかりの母だった。

悲しみに暮れて帰郷すると、姉もまた、この世の人ではなくなっていた。天涯孤独となった石童丸は再び高野山へ。道心を師に修行すること34年。しかし父が一堂にあっては何かと障りも多く、道心は善光寺如来のお告げと言って信濃の善光寺に旅立ち、当地で往生する。道心の往生を悟った

〈これが母子今生の別れになるうとは、神ならぬ身には知るよしもなく、心細道ただ一人村過ぎ川渡り谷越えてはるばる登れば、日は入合いの不動坂……〉

母を残して石童丸が山に登る場面だ。父子の別れではへ親は子を知り、子は親を知らず。愛し吾子を前にして、名乗れぬ父の悲しみは、泣いて血を吐くほど、ぎす。台本を声に出して読んでみると、詞章の洗練された修辭、巧みなりズムが魂にまで響くよつだ。決して難解ではなく、かといつて俗に流れてもいない。それを抑揚豊かに朗誦する絵解きは明らかに、説経節や義太夫節、謡曲、講談、浪曲といった語り芸と同じ系譜にあることが分かる。

竹澤さんは「苅萱」のほか「十王巡り」「六道地獄絵」の絵解きも演じた。こちらは「苅萱」と違って軽妙かつ当意即妙の趣があり、面白く聴ける。三途の川を渡った亡者が裁判で生前の悪行を言い立てられると、「記憶にございません」……。どこかで聞いたふうな弁解が会場の笑いを誘う。世相を斬る饒舌も「苅萱」にはなかったもので、それぞれの絵解きの味比べもまた一興か。

明治の中頃まで盛況だった

産経新聞

平成29年(2017) 日刊26814号

8|23[水]



処暑

産業経済新聞(サンケイ)
THE SANKEI SHIMBUN

発行所 ©産業経済新聞東京本社2017
〒100-8077東京都千代田区大手町1-7-2
☎東京(03)3231-7111 (大代表)

産経新聞



長野市の西光寺本堂で「絵解き」を口演する竹澤環江さん
(西光寺提供)

伝

絵解き

は庶民の娯楽の一つでもあったという。

この日、竹澤さんは2幅の「苧萱道心石重丸御親子御絵伝」に描かれた計27の場面を、お羽根指し(先端に羽根のついた棒)で次々と指し示しながら、折り目正しく、熱のこもった絵解きを展開していった。よく知られた話ながら、念のため、西光寺が発行する『絵解き 苧萱道心と石重丸』の「台本」を基に粗筋を紹介しておきたい。

世の無常を観じて筑前国(福岡県)の所領も、身重の妻、子も捨てて出家した父(苧萱道心)。後に生まれた石重丸は13歳の春、父

善光寺に旅立ち、当地で往生する。道心の往生を悟った石重丸は、早速信濃に赴き念仏に励む。そして道心の死から2年後の同じ8月24日、とうとう親子の名乗りを交わさぬままに石重丸も亡くなる…。

「高野山が女人禁制でなかったら、石重丸も母も父に会えたであろうに」。子供心に突き刺さった悲しみが、竹澤さんの絵解きを聴くうちに蘇ってくるような気がした。ただ、今の私はむろん子供ではなく、同時に、絵解きというすばらしい「語り」に陶然と酔つこともできたのである。

で、それぞれの絵解きの味比べもまた一興か。

明治の中頃までは盛んだった西光寺の絵解きは、一時期途絶えたという。復活させたのが竹澤さんの義母にあたる西光寺住職夫人、竹澤繁子さんで、昭和40年代末の頃だったとか。平成10年からは繁子さんの指導のもと、環江さんが絵解きを継承し、「昨年にはパリの大学でも口演したというから、頼もしい。

絵解きと同じく物語、絵、語りの3つで構成される紙芝居も、今では日本独自の文化として海外にも普及し始め、作品は多くの言語に翻訳されている。演者の声や演出が臨場感をいやが上にも高め、物語への共感が聴衆の間に広がっていく。

絵解きや紙芝居のこのような醍醐味に、日本人自身ももっと注目してもよいのではなからうか。

私は今、遠いあの日の林間学舎を思い出しながら、ふと、苧萱の話をお聞かせしてくれたお坊さんは、もしや、道心その人ではなかったかと、幻想めいたことを考えてみた。

あすは「8月24日」、苧萱道心・石重丸父子の「祥月命日」である。

産経新聞

平成29年(2017) 日刊26814号

8|23[水]



処暑

産業経済新聞(サンケイ)
THE SANKEI SHIMBUN

発行所 ©産業経済新聞東京本社2017
〒100-8077東京都千代田区大手町1-7-2
☎東京(03)3231-7111 (大代表)

産経新聞

この日、竹澤さんは2幅の「苧萱道心石童丸御親子御絵伝」に描かれた計27の場面を、お羽根指し(先端に羽根のついた棒)で次々と指し示しながら、折り目正しく、熱のこもった絵解きを展開していった。よく知られた話ながら、念のため、西光寺が発行する『絵解き 苧萱道心と石童丸』の「台本」を基に粗筋を紹介しておきたい。

世の無常を觀じて筑前国(福岡県)の所領も、身重の妻、子も捨てて出家した父(苧萱道心)。後に生まれた石童丸は13歳の春、父

絵解き

伝

善光寺に旅立ち、当地で往生する。道心の往生を悟った石童丸は、早速信濃に赴き念仏に励む。そして道心の死から2年後の同じ8月24日、とうとう親子の名乗りを交わさぬままに石童丸も亡くなる…。

「高野山が女人禁制でなかったら、石童丸も母も父に会えたであろうに」。子供心に突き刺さった悲しみが、竹澤さんの絵解きを聴くうちに蘇ってくるような気がした。ただ、今の私はむろん子供ではなく、同時に、絵解きというすばらしい「語り」に陶然と酔うこともできたのである。

で、それぞれの絵解きの味比べもまた一興か。

明治の中頃までは盛んだった西光寺の絵解きは、一時期途絶えたという。復活させたのが竹澤さんの義母にあたる西光寺住職夫人、竹澤繁子さんで、昭和40年代末の頃だったとか。平成10年からは繁子さんの指導のもと、環江さんが絵解きを継承し、一昨年にはパリの大学でも口演したというから、頼もしい。

絵解きと同じく物語、絵、語りの3つで構成される紙芝居も、今では日本独自の文化として海外にも普及し始め、作品は多くの言語に翻訳されている。演者の声や演出が臨場感をいやが上にも高め、物語への共感が聴衆の間に広がっていく。

絵解きや紙芝居のこのような醍醐味に、日本人自身ももっと注目してもよいのではなからうか。

私は今、遠いあの日の林間学舎を思い出しながら、ふと、苧萱の話をお聞かせしてくれたお坊さんは、もしや、道心その人ではなかったかと、幻想めいたことを考えてみた。

あすは「8月24日」、苧萱道心・石童丸父子の「祥月命日」である。



長野市の西光寺本堂で「絵解き」を口演する竹澤環江さん(西光寺提供)